

京都大学大学院工学研究科 学生員 ○厚井 理沙
 京都大学大学院工学研究科 正会員 菊池 輝
 京都大学大学院工学研究科 正会員 北村 隆一

1. はじめに

郊外は様々な都市施設を含めて開発され、公園や集会所、商業施設など、人々が日常的に交流できる公共領域が十分に整備されている。しかしながら、現在そこで子供達が遊ぶ姿や人々が交流する姿を目にすることは少なく、郊外はコミュニティの希薄さが指摘される地域となっている。この原因として、現在郊外に存在する公共領域は、人々に公共領域として認識されていない可能性が考えられる。そこで本研究では、人々の公共領域の認識に影響を与えている要素を明らかにすることを目的とする。さらに、公共領域の認識という観点から、都心部と郊外の公共領域を比較し、郊外の公共領域が人々に公共領域として認識されているかどうかを明らかにする。

2. 仮説¹⁾

本研究では、公共領域の定義として社会学者 Oldenburg²⁾の提案する“第3の場所”の概念と、Jane Jacobs³⁾の提案する偉大な都市の4つの条件を導入した。まず、“第3の場所”とは、誰に対しても開かれ、人々が日常的に交流できる場である。さらに偉大な都市の条件とは、①十分に高い人口密度がある、②複数の機能を果たす、③街路は狭く曲がりくねっている、④古い建造物が存在する、の4点である。本研究における公共領域とは、この交流の場と4つの条件に加え、公園、遊歩道や景観など、人々が「共有している」と意識するものを含むものとする。本研究では、人々は上記の概念、条件を満たす領域を公共領域として認識するという立場から、表1に示す仮説を設ける。

表1 本研究で指定した仮説

仮説1	人は様々な人が集まる場所を公共領域として認識する
仮説2	人は雑多な活動の見られる場所を公共領域として認識する
仮説3	人は様々な施設の集まる場所を公共領域として認識する
仮説4	人は歴史的に形成されてきた場所を公共領域として認識する

3. アンケート調査

これらの仮説を検証するため、本研究ではアンケート調査を行った。調査では、都心部、郊外から上記の仮説を満たすと考えられる領域とそうではない領域を選出し、それ

らの領域の写真から受ける印象を計量化することを試みた。調査票には、上述の写真と、2で述べた仮説をもとに設定した領域の印象を問う9項目の質問を設け、「全く思わない」から「全くそう思う」までの7段階の指標で回答を要請した。

調査対象は、都心部と郊外に居住する1600世帯とし、住宅地図より無作為に抽出した。都心部として京都市中京区の御池通り、四条通り、烏丸通り、寺町通りに囲まれる地域を、郊外として京都市西京区の洛西ニュータウンを選出した。調査票は直接配布し、郵送により回収した。回収数は536部、回収率は33.5%であった。

4. 分析

公共領域の認識に影響を与える成分を抽出するため、領域の特性に関する9つの質問項目の回答に主成分分析を行った。アンケートの回答から得られた7段階の指標は1から7までの数値で表し、これらを標準化したものを投入変数とした。結果を表2に示す。

表2 領域特性評価の主成分分析結果

	成分	
	1.私的公共領域度	2.規範公共領域度
様々な人がいる	0.33	0.72
人々が様々な目的を持っている	0.26	0.78
社会的な交流が行える	0.51	0.54
にぎわいがある	-0.09	0.81
落ち着ける	0.86	0.00
自由にふるまうことができる	0.75	0.16
共有していると感じる	0.73	0.30
欠かせない場所である	0.62	0.32
歴史を感じる	0.22	0.48
因子負荷量	30.18%	28.13%

第1主成分は、「社会的交流」、「落ち着き」、「自由なふるまい」、「共有感」、「大事さ」の項目が高い負荷量を示した。これらの中でも、「落ち着き」、「自由なふるまい」の2項目が特に高い値を示し、公共空間における個人のふるまいや領域に対する愛着を示している項目であると考えられることから、矛盾した表現ではあるが、この第1主成分を「私的公共領域度」と名付けた。

第2主成分は、「社会的交流」、「人の多様性」、「目的の多様性」、「にぎわい」、「歴史」の項目が高い負荷量を示した。これらの項目は、Jacobsの偉大な都市の4つの条件であり、本研究で定義した公共領域の条件ともいえる項目であることから、第2主成分を「規範公共領域度」と名付けた。主成分分析の結果、2で仮定した公共領域の要件に整合した規範公共領域度の他に、私的公共領域度という成分が存在し、それらが人々の公共領域の認識に影響を与えているということが明らかとなった。

5. 都心部、郊外における公共領域の認識

都心部、郊外に存在する公共領域の認識の差異を明らかにするため、都心部の各対象領域の全体と、郊外の各対象領域の全体について、2主成分の主成分得点の平均値と標準偏差を求めた。結果を表3に示す。この結果、私的公共領域度は郊外で高い値を示し、規範公共領域度は都心部で高い値を示していることが明らかとなった。

表3 郊外、都心部の領域の主成分得点の平均及び標準偏差

	都心部 (n = 1084)		郊外 (n = 783)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
私的公共領域度	-0.36	0.93	0.50	0.86
規範公共領域度	0.17	1.01	-0.23	0.94

さらに、都心部と郊外とで、主成分得点の平均値に有意な差があるかどうかを検証するため、一元配置分散分析を行った。結果を表4に示す。この結果から、都心部と郊外では、各主成分得点の平均値に有意な差があることが明らかとなった。

表4 対象地域別、各主成分得点の一元配置分散分析結果

	自由度n1 (グループ間)	自由度n2 (グループ内)	F値	有意確率
私的公共領域度	1	1865	420.40	0.00
規範公共領域度	1	1865	76.35	0.00

都心部で規範公共領域度が高い値を示していることから、都心部には本研究で定義した公共領域が郊外と比較してより豊富に存在している可能性がうかがえる。しかしながら、私的公共領域度が低い値を示していることから、規範的な公共領域は、人々が思うように過ごし愛着を感じるような領域には必ずしもなりえない可能性がうかがえる。

さらに、各主成分得点の平均値と標準偏差を、対象領域別に求めた結果、鴨川、新京極公園、ラクセースを除いた各領域では、全体と同様の結果が得られ、都心部では私的公共領域度が低い値を、規範公共領域度が高い値を示し、郊外では逆の傾向が見られた。

都心部全体、郊外全体の結果と相違のみられた3領域に

ついて主成分得点の平均値及び標準偏差を求めた結果を表5に示す。

表5 対象地域別、主成分得点の平均及び標準偏差

	都心部				郊外	
	鴨川 (n=165)		新京極公園 (n=160)		ラクセース (n=196)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
私的公共領域度	0.31	0.93	-0.40	0.91	0.32	0.77
規範公共領域度	0.19	1.00	-0.73	0.94	0.39	0.83

まず、私的公共領域度、規範公共領域度共に正の値を示している、鴨川とラクセースに着目する。鴨川一帯は京都に昔から存在する風景を呈示する、歴史的に形成されてきた公共領域であるといえる。さらに現在では、人々が思い思いに過ごしている姿が見受けられる場である。一方、郊外の領域であるラクセースは、洛西ニュータウンの中心部に位置し、商業空間やオープンスペースなど様々な施設を備えている領域である。整然としており、落ち着いて過ごせる場所であるといえるだろう。これらの2つの領域が、規範的な公共領域でありながらも、私的公共領域度が高い値を示している背景として、喧騒がなく落ち着いて自由に過ごせるということが考えられる。

どちらの成分も負の値を示した新京極公園では、内部は整備され、人々が自由に過ごす姿が見られる。しかしながら、周囲は放置自転車やごみで囲まれており、外側から見ると、非常に閉ざされた領域であるように見受けられる。このような要因から、この領域では、どちらの成分も低い値が示されているものと思われる。

6. 結論

分析により、公共領域の認識には、規範的な要素だけでなく、私的公共領域度という要素が影響していることが示された。また、郊外の公共領域は、私的公共領域度という要素によって、公共領域として認識されていることがわかった。言い換えると、都心部の公共領域では規範公共領域度が高く、郊外の公共領域では私的公共領域度が高くなる傾向があることが明らかとなった。

今後は、これまで公共領域を規定する際に援用されてきた要素だけでなく、領域を利用するという観点から、居心地や周囲の景観との調和など、これまでとは異なった公共領域の質的側面を改めて考えていく必要があるだろう。

参考文献：1) 北村隆一編著：ポスト・モダン化の都市と交通戦略、学芸出版社、pp.211-242, 2001。
2) Oldenburg R.: The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Community Centers, Beauty Parlors, General Stores, Bars, Hangouts and How They Get You Through the Day, Paragon House, New York, 1991。
3) Jacobs J.: The Death and Life of Great American Cities, Random House, New York, 1961。